



バルハットの本生画像について(その二)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 正雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000962

バルハットの本生図像について(その二)

江口正雄

北海道学芸大学釧路分校国語国文教室

Masao EGUCHI: The Images of
Jātakas in Bharhut (Part 2)

六牙白象本生

バルハット欄楯柱円型浮彫。題銘は刻記されている。それに拠ると Chadamtiya-Jātaka とあり、^{註)}即ちJātaka No. 514. Chaddanta-Jātaka に相違ない。



六牙白象本生図像

既に極めて著名な説話であり、且又多くの作例を東亜各地に於いて見ることが出来るため、また従つて之等に関する調査研究も通称五百五十という数多くの本生説話中際立つて十分に為されている。

註) 小野玄妙; 仏教美術講話では chhadantiya-J とあるも恐らくこれはミスプリントであろう。敢えて誤りと指摘するにも当たらないが、

試みにその二三を挙げてみよう。

バルハット浮彫については

A. Cunningham; The Stūpa of Bharhut. p. 61. Plate XXVI, 6 アマラヴァティー彫刻

A. Foucher; The Beginning of Buddhist Art.

アジャンター壁画

J. Griffiths; The Paintings in the Buddhist Cave Temples of Ajantā. (p.37. Fig.73)

小野玄妙; 仏教美術講話, 解説

逸見梅栄; 印度古代美術. p. 207, Plate 241.

内藤藤一郎; 日本仏教絵画史・飛鳥篇. p. 31~48.

等その主なるものである。いま是等を参照しつつ凡そ以下の様にまとめてみよう。

この説話の典拠を漢訳經典のうちより求めると次に並記するように甚だ多い。

六度集經卷四, 28.

大莊嚴論經卷十四, 69.

失訳雜譬喻經卷上, 9.

雜寶藏經卷二(六牙白象緣)

大智度論卷十二卷九十三

摩訶僧祇律卷二(大正藏經第二十二卷 p. 204)

説一切有部藥事卷十五(大正藏經第二十四卷 p. 71)

大方向十輪經卷四。

大乘大集地藏十輪經卷四。

宝積經卷八

大唐西域記卷七。

等がある。

南伝では Jātaka No. 514 は勿論のこと、Kalpadrumā-vaḍānamāla や Jātaka-Nidānakathā (Fausböll's Ed., Vol. I. p. 45)にも記される。いまこれら一々を対比する余裕は持たないが、説話の本筋は異らないにしても多くの脚色が夫々に作されているので細事は甚だ多岐に渉り、その異同の指摘も容易ではない。唯、しかしこの異同ある内容と数多い経律典拠とを対比せしめ仔細に検討するならば本生説話発達の経路を辿ることができるわけで重大な意義がある。然し乍ら本題の研究目標からは逸れて了うためこの点については他日稿を改めて論究することとする。

一体、象に関する本生説話はその数が多い。

Jātaka の中から抽出してみると、象を取り扱った説話は六牙白象本生を筆頭に凡そ十二の説話がある。

その中、最も人口に膾炙し、且時代を逐い、地方に伝えられ、美術に表現せられたものを求めれば六牙白象本生位多くの人々に親しまれ、また永い時代を愛されて来たものは外にはない。

図像に表現された作例の方からみても以下その遺蹟を挙げることで納得がまいろう。

サンチー塔門の彫刻

アマラヴァティー欄楯円型浮彫

アジャンター No. 10 窟壁画

〃 No. 17 窟壁画

ガンダーラフリーズ浮彫

亀茲キジル壁画

ボロブドゥル第二廻廊浮彫

等これである。

前にふれたように説話は夫々の典拠により枝葉があり、脚色が施されているため同一でないが説話のあらすじは斯うである。

よく繁茂した森の中、美しい蓮池の畔、大尼拘律樹の下に六牙を持つ白象王が多くの象群をつれて棲んでいた。或日、美しく咲き綻んだ沙羅の樹の下で、遊び戯れて鼻でその枝を打つたところ、風上にいた小夫人の頭には枯枝が落ち、風下にいた大夫人の頭上には美しい花が散りおちて愈々美しく見えた。これを根にもつた小夫人は、かてて加えて白象王が一茎の蓮花をとつて大夫人に与えたのをみて嫉妬の心にかき立てられた小夫人は必ず再生してこの怨みを報ぜんと言つて悶死した。

誓いの通り小夫人は、人間界に再生し王妃となつた。王妃は王に森の中の白象王の六牙を請うた。これは宿怨を報ぜんが為である。

頑健で醜悪な獵師は怨のために苦辛して白象王の場所に来り、象王が正法の帰依者なることを奇貨として、聖者の標幟たる袈裟を被て象王に近づき毒箭で射た。敬虔な象王は毒箭に斃れ六牙を切りとるに任せた。

獵師は帰城して六牙を献上した。しかし王妃はその六牙を見るや、にわかには血を吐いて死んでしまう。悪業の帰結はかくも恐ろしいものであると因果応報の理と女性の妬心の劇しさを訓したもので当時の人々に親しまれた説話であり、また従つて絵画彫刻の好題材とされたものである。

言うまでもなく象王は釈尊、狐師は提婆達多、王妃はある悪徳比丘尼である。

構図は円型の中に尼拘律樹の下の象の一群、大夫人の頭に美しい娑羅の花が散り落ちたところ。六牙を狐師に鋸で切らしている。象王狐師が傍らに弓箭を置いて及び腰で牙を切りとつているところは最も動的な表現で巧みである。総じて二契の簡単な図で書き、説話の推移は恐らく説明者の補足があつて理解せしめられたものであろう。もつとも余りにも膾炙している物語りであつたから或いは観者はいきなり図像に接しただけで理解したかも知れないが、兎に角全体としては説明的要素が欠けていて舌足らずの本生図像である。

これを他の作例についてみると、かなりの相違がある。即ち、サンチーでは南、北、西の各門に図せられているが南門のものは就中美しく且構図は巧みであるし、アマラヴアティーの浮彫は同じ円型のスペースの中に三景乃至四景に物語りの全体を彷彿せしめ、またアジヤンター No. 10窟の壁画は30呎に及ぶ間に最も詳細に涉つて画いているが、これらを併せ考えると唯単にその図像に対する信者の理解度に応じて作つたものとは言い切れないし、他の種々な要因があつたに相違ない。

他の図像の場合にも説明に及んだが、奉獻者の財産、地位、権力等がいろいろの貌で影響し作用して現図として製作されたと見るべきであろう。

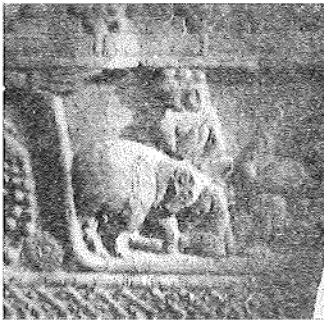
皮衣者本生図像

欄楯笠石の浮彫であるが二面がある。(ここでは仮にA、Bとする) 記銘は無いが、Jātaka の No. 324. Cammasātaka Jātaka なることは先賢の指摘されるところで異論はない。

干淳博士の論著の中に Cammataka とあり、典拠として摩訶僧祇律卷三が挙げられておるが、^(註) 本生経類の思想史的研究、附篇、Bharhut 彫刻。p. 5.

これは脱字であろう。また僧祇律卷三には当該説話がないし同時に頁も指示せられているので卷二のミスプリントに違いない。

皮衣者本生図像



僧祇律卷二(大正藏經第二十二卷 p. 242)によると、

過去世時有二婆羅門、往南天竺、學外道經論、學已還其本国、當其還時道由曠野經放牧処、見二羝羊當道共鬪、羊相觸法、將前而更却、時在前行者專愚直信、語後半言、看是羝羊四脚之獸而用議議、知我婆羅門持戒多聞、數數為我却行開路、後伴答言、婆羅門、汝莫輕信謂羊有議、此非相重開路相避、羊鬪之法、將前而更却、在前行者不信其語、為羊所觸即時絕倒、傷破兩膝悶絕躄地、衣服傘蓋裂壞蕩盡、彼時有天而說偈言、

衣服裂壞尽 体傷悶躄地
此患癡所招 斯由愚信故

Jātaka の説話内容は大同小異である。

即ち、

往昔、ペナレスの町に一人の皮衣を着た婆羅門が居り、市中を行乞しての途次、偶々二頭の牡羊が角つき合つて格闘しているところに通りかかった。

一頭の羊が次の角突き合せのため頭を垂れて後ろに退くのを見た彼は羊さえ己れに敬意を表し低頭しているものと得意になつた。そこに通りあわせた賢明な一商人は外見のみ信じたところで何にもならないと諭えたが、間一髪、疾風の如く突進して来た羊に、今しも羊を称えていた婆羅門の腰のあたり、一発グワンと角づきを喰らわせた。

「腰くだけ、一却梨の荷はとび散り、婆羅門の全ての財は失なわれぬ、腕さし伸べてひた嘆きに嘆けどせんなく、ついに「突進」と一途の羊に行者はつき殺され果てぬ」と偈にも頷われる。

成程両者を対比してみると Jātaka に載せられる説話は単純でむしろ本生話の性格をさえ失つている感がある。

言うならば Jātaka を祖先型として之を発展せしめたものが僧祇律の説話であろう。

確かに僧祇律の説話は一読以つて了解せられるところであるが、浣衣者の話より転じて過去世に於ける譬喩を本生説話の型式に充当して現世に於いて、軽信を為す癡人も実は過去世に於いても同じ性格を持つていて、因果律によつて現世に於いても改められていないということを強調しているもので、その引証として二羴羊の説話が続けられている。理論的に更に展開させたものと見るべきではあるが、むしろこれは失敗であつたらう。

図像についてみると、笠石に A. B 二連の表現は笠石浮彫としては他に例をみない。石柱に四段の角形スペースを占めた比豆梨不那奇本生図が特例であることは前稿に於いて説明したが、笠石浮彫はスペースが他に比して狭少である。その狭少を承知の上で図像を施した理由は他に十分考慮さるべきである。笠石浮彫の場合一シーンに限定される可能性が多いが、＝即ち一契図、かかる連続場面に於いても一画一契をとつている。

即ち左図では一却梨の荷を担つた皮衣の婆羅門が羊の態を見て得意然となつている。傍らには危難を避けよと商人が注意を喚起している部分を表現している。

右図では偈文のとおり婆羅門は羊の角突きに遭つて顛倒している有様を描く。＝即ち一面一契図

つまり二面二契であるが、他の笠石浮彫に画かれた本生説話と皮衣者本生説話の両者の図像の彫刻されねばならない比重というものを考えた場合、さして皮衣者本生説が二面を要するほど重大であるとは思えない。結局、製作依頼者による指定とか好悪とか寄進の財力に左右されただけのものではなからうか。

仙人鹿本生図像

欄楯笠石に施された浮彫で、記銘には Isimiga-Jātaka (C. J. 15) とある。逸見博士が仙人鹿本生として紹介されているが^(註) 仙鹿と訳すことの方がむしろ妥当でなからうか。干潟博士は Nigrodhamiga 鹿王本生とされている。^(註)

註) 逸見：印度古代美術。解説 p. 209.

註) 干潟：本生経類の思想史的研究。附篇 J. 245索引。

Jātaka では No. 12, Nigrodha miga Jātaka がそれで、この故に説話題名を変えられたのかも知れない。

主に依拠するところが Jātaka であるのと、記銘によるとの差異で、本来いずれでも差支えあるまい。

仙人鹿本生圖像



漢訳経典には多く紹介されていて以下の如く典拠を求めることが出来る。

- 出曜経卷十四(逸)
- 六度集経卷三(逸)
- 西域記卷七(逸)
- 六度集経卷十八(干)
- 六度集経卷五十七(干)
- 大莊嚴論経卷十四, 70.

道略集雜譬喻経, 20.

仏本行経卷五(干)(大正蔵経第四卷 p. 89)

大智度論卷十六(大正蔵経第十五卷 p. 178)

摩訶僧祇律卷一(干)(大正蔵第二十二卷 p. 230)

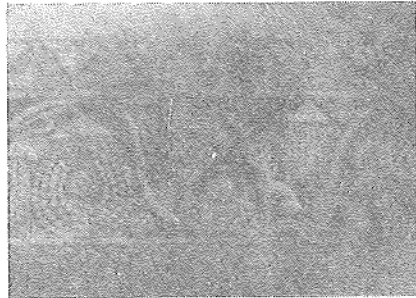
等がある。

註) (逸) (干) とあるは典拠の紹介に於いて新しく (逸) は逸見梅栄博士により、(干) は干沔竜祥博士に依るものである。

野 鷄 本 生 図 像

銘文には Bidala. Kukuta Jātaka とあり、Bidala は猫、Kukuta は野雞であるから「猫と鷄の本生」と訳すべきか、逸見；印度美術史には「猫本生・鷄本生」としているのがそれで訳名としては多少ぎこちないが、それでもよろしかろう。説話の主人公は野雞であるから表記の如く、拙題を着けたが飽くまで説話内容に依拠したところからの命名である。もつとも漢訳では生経卷一の六には野雞経として同説話が紹介されているので説話の命名は新しい見解とは言い難い。雑宝蔵経卷三, 35. の山雞王経も同じ説話を取扱つてはいるものの命名にはこれをとらない。

野雞本生圖像



Jātaka では No. 383 (Kukkuta) である。因みに、逸見；印度美術史では No. 38 と紹介され

ているが、No. 38 は Baka 樹神本生であつて Kukkuta ではない。恐らく脱字による誤謬であろう。No. 383 と訂正すべきである。

この本生説話は西伝してイソップ物語中の一、Dog, Cock and Fox, また Fox and Cock として古くから著名な説話であることは、いま茲に説くまでもない。

往昔、釈尊が前世に於いて菩薩の行を修していた時、野雞の身を亨けて大叢林の中に栖み、慈心を行じていた。同じ叢林中に棲む猫は性極めて凶悪狡猾で野雞の群れを一々喰いつくし、ついに残すは彼の野雞一羽となつて了つた。

やつとのことで最後の一羽を樹上に見つけた猫は害心を抱きつつも甘言を以つて、野雞を誘惑し己が妻となるべく、しきりに慫慂説したが野雞は猫の巧言令色を見破り、彼の下心を察してよくその要求に応ずることなく、ついにその寿を全うしたという物語で、イソップ物語のそれは

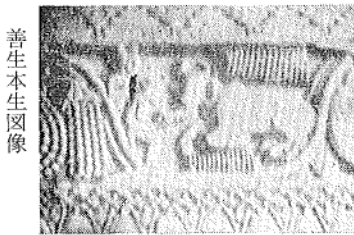
確かに同巧異曲であり、またここに淵源を発していると見てよい。

A. Cunningham 氏の The Stūpa of Bharhat に於いても p. 77. Plate XL VIII に紹介せられているところである。

笠石に浮彫されていて図柄は一契の簡単な描写である。すなわち、樹上にある野雞とそれを見上げている猫の図で、左上樹上にいるのが野雞、右下方に蹲踞するのが野猫である。猫の表現は極めて巧みで、会話たけなわなる一景を描出する。全体の構図も巧みであるが、ただ、右上方の図案化された花実は繁瑣であり、謂わば蛇足とも見られるべきであるが、総じて印度彫刻に於ける満飾の特質を遺憾なく備えているものと言つてよからう。

善 生 本 生 図 像

支謙訳雜譬喻經卷四（後漢月支沙門支婁迦讖訳、大正藏經第三卷本緣部 p.499. 4）に昔有賢者奉法精進，得病奄亡，妻子隳恋無聊有生，火葬取骨埋去既訖，瘞亡經道，香燈不設，家財饒富月



善生
本生
図像

且晦朔烹殺饌饌上塚集会，相哭哀摧，悲悼斷絶，亡者戒德，終乃昇天，天眼遙見愍其笑之，愚痴之至，便作小兒於辺牧牛，牛便卒死兒便隳哭，刈草著前曉諭令食，復打呼起对泣自伝，如此終日，衆人怪笑共往呵問，汝誰家子，牛死当歸語家，隳哭何益，牛死豈死乎，日我不愚也，牛死尚在猶可有望，汝父早死，設百種食共向隳哭，焦骨何知，衆聞霍解曰，吾本汝父

蒙仏生天故来积卿，因還復天身，欲得如我加進道供已忽不現，妻子内外便還精進，戒德不施拯濟一切不復憂愁，皆得道迹同時生天，

父を喪つた一人の長者が悲嘆の余りに仕事など少しも手につかない。その子の善生は賢い子で、城外に斃死していた牛屍に草や水を与えて父に示し、生死事大、無常迅速の悟りを教え、死者は永遠に甦らないのに徒らに嘆き悲しむことは無意味なことだと訓した物語

説話の原型は、確かにこの点を強調していて、仏教の諦観を教え、信仰確立のよすがとするには好簡なものである。ただ然し、当時受容されたこの説話も説話のもつ内容から推進すると、生死の問題はこの単調な主張だけでは漸がて民衆には納得させるだけの教化力に不足が生ずるとの予想が生まれる。

大乘仏教の興起とともに、さらに説話には多少の潤色が加えられて行くものと見られる。北伝漢訳經典について照合してみれば明瞭である。即ち前記の支謙訳雜譬喻經や衆經撰雜喻についてみても容易に首肯し得るところである。ただこの際その潤色の度合いが問題となる。即ちここではその潤色の度合いは多くなく従つて漢訳經の成立期に於いては比較的早期のものと判断されるし、その内容と説話の原型とを比較研究することによつて、更に別の問題点が想定される。

印度古代期…バルハット期に於いて教化力をもつた該説話はそのまゝ素直に北伝せず、大乘興隆期に於いては、やや脚色の手が加わりより説話として洗練されはしたが天山路を經過して流伝しつつある間にそれは発展せず却つて中国本土に入るに順い消滅して行つたものと思料せられる。図像の欠除等が逆にその裏付けの証明となるであろう。

理由としては説話内容が中国の民衆に納得されるにしても説話のもつ説得力に稀薄であつた為と、説話のもつ単純性から来る飽満さが却つて説話信仰（本生信仰）を崩壊する要因となつたものであろう。

図に就いてみると、斃死した牛とその死牛に草をみずかう童子、童子の背後に彼の父を描き出

している。表現としては如何にも稚拙であるが細部についてみると、童子の草飼う姿と童子に訓えられている父の姿態はともによく、その彫刻も他のものと比すると細かいながら巧みである。物語りとしては単純であるから構図も容易で一契の型式を踏みままとまりをよくしている、と云うべきである。

ヤヴマツヂヤカ本生図像

欄楯柱円型浮彫、銘文にはYavamajhakiya-Jātakaとある。典拠を求めればJātakaでは No. 546

ヤ
ヴ
マ
ツ
ヂ
ヤ
カ
本
生
図
像



の Mahā'immagga (Mahosadha 賢者本生) がこれで、漢訳では仏説菩薩本行經卷下 (失訳、大正藏第三卷本緣部上、p. 119、中段) にはわずか摩休沙陀太子時、以藥除衆生病、復入大海得摩尼珠、復除衆生貧困、とのみ紹介されていて説話を載せていない。Mahosadha 賢者を摩休沙陀太子とし慈悲行を積功したとのみである。

小乗に属するが根本説一切有部毘奈耶雜事卷二十七、三藏法師義淨奉制訳、第六門第四子撰頌之余明大藥事、同じく卷二十八、第六門第四子撰頌之余大藥には非常に詳細に涉つて説話が展開している。

説話の題名ヤヴマツヂヤカに就いては逸見博士は以下の如く説かれている。

ヤヴマツヂヤカとは都市の城門外に接し、製造販売交易等の実業に従事する者が形成する部落乃至商市の義ならんと。

逸見梅榮；印度古代美術 p.205, No.237 図解説、毘奈耶雜事卷二十七には王於暇日出城遊觀、聚落居人並皆存問、此等是誰所管封邑、答曰威是某甲大臣所有…於此國中有一都処名曰滿財（弥絺羅城）城内有人名曰円満、当生一子号為大藥、成立之後与王共理、臨機制斷無遠不伏、王極快樂垂拱安神、時王令使往滿財城、訪問円満為無とあり、成程、博士の説かれるところは首肯せしめられるものがある。

前掲書；満財城を弥絺羅城とする。

大正藏。前掲書 p. 335.

ただこの場合、商売の市なることは明らかとなるが必ずしも城門外の商場を指してはいない。古代印度に於ける城市の沿革を調べてみなければならぬこと勿論である。

博士の想定はこの点から導き出されたものであろう。私はこの点については資料の持ち合せがないため差控えなければならないが、西域準アジア高原地帯及び天山兩路に發達したオアシス国家群のあり方を勘考した場合、——たとえば是は飛躍した例証であるけれども中国諸都邑にあつて城外特に正門外に商市の發達したことは大方の沿革で明らかであるところから類推が許されてもよいであろう。

満財城（弥絺羅市）の四城門の外郊には斯る商市が發達していた。説話はここから始まる。

東門外の商市の豪商の子マホーサダ（菩薩本行經では太子と表現するが、太子は必ずしも王子とか皇太子を意味しないことは他の漢訳に多く見ることが出来る）は極めて聡明であつたので、その噂をきき知つた国王は特に聘して近侍させることとした。

王の寵愛をうけるにつれ他の四人の輔相はその地位が奪われはしまいかと気が気でない。そこで悪計を企み、王の珍重する宝物を盗み出し、他の品とともにマホーサダ（大藥）の家に届けさせ、さて日を更えて王に陳白して大藥追捕の兵を差し向ける。

大藥は巧みに追捕の手をのがれ身を潜めると、今度は四人の輔相は夫々大藥の美しい妻アマラ

一（不死）に目をつけ何とかしてものにしようと互に秘して恋文を送り気を惹いてみる。アマラーからの返書を得た輔相は夫々勇躍してその家に出かけたが、とどのつまりは何れも頭を丸坊主に剃られ、籠の中に閉じこめられてしまうというとんだ醜態を演ずる。軀てアマラーはその四つの籠と一緒に先に夫を陥れんとして届けられた王の宝物を王の前に運びその間の事情を逐一説明して美事に夫の無罪を証した。

この説話と同じ係類に属するものは Jātata 547 説話中に非常に多く他にその例をみないが、その何れもが賢者本生といい、同巧異曲である。この点から類推してゆくとその説話の祖先型は一に発し、時と場所とによつてかく多岐に増えたものと考えられる。

即ち、

No. 110. Sabbasamhāraakpañha 賢者本生。

No. 111. Gadrabbapañha 賢者本生。

No. 112. Amarādevipañha 賢者本生。

No. 170. Kakantaka 賢者本生。

No. 192. Sirikālakanni 賢者本生。

No. 350. Devatāpañha 賢者本生。

No. 364. Khajjopanaka 賢者本生。

No. 452. Bhūripañha (Mahosadha) 賢者本生。

No. 471. Mendaka 賢者本生。

No. 500. Sirimanda 賢者本生。

No. 508. Pañca-pandita 賢者本生。

No. 517. Dakarakkhasa 賢者本生。

等が同じ系列のものとして考えられる。

なお、この外にしつこく言い寄る男を騙して籠に閉じこめたという物語は Vrihatokatā. Kathāsaritsāgara²⁶⁾ にも見えていると云うが筆者はいまだ見ていないので、言及をはばかり紹介にとどめて置く。

マホサダー（大薬）とアマラー（不死）との出会いについての物語は Mahāvastu²⁷⁾にも見える。

註) Kathāsaritsāgara, Towney's Tr, 2 vols.

註) Mahāvastu, Ed by Senart, 3 vols, Paris 1882—97.

図像についてみると、説話の最後の部分即ちクライマックスの場景一契の構図で、上部中央に坐すは王、右方円な乳房をあらわす女性はアマラー、下方魚籃の如き三箇の籠には夫々輔相が押し込められた態で、籠の口に丸坊主の顔を正面に描き出している。

アマラーの姿勢はいま前後の事情を王に具陳しているところで、比較的大きく画かれているのは物語の性質から致し方もあるまいが、本図が特に他の図像と異つている点は主人公大薬即ち菩薩の表現がないことである。もつとも大薬が追捕の手を逃れて潜匿している間のことであるから構図の上に容れる訳にもいかない。この点に関して仏身の表現を見ないのは無仏像期の証拠であるとか、直接菩薩の相好を敢えて描出さなかつたものであるとかの意見は成り立たない。斯うした考察のなされる虞れはあるが、而し当時の造像者にあつては極く自然に説話ととり組み一契の構図をとつたもので揣摩臆説はなすべきではない。言うまでもなく他の図像を併せ考えればよいのである。

鹿の仔本生圖像

欄楯笠石浮彫，記銘はない。本圖像はカニンガム氏では紹介されていないが，逸見；印度古代美術にあつては図版 No. 246 に載せられている。（p. 131）干海博士はその著のうちで Jātaka No. 372 Migahotaka Jātaka としてあるが直接同圖像についての論述はない。従つて逸見学説として本圖像を見るべきか。

説話としては Jātaka No. 372. Migapotaka 帝釈天本生話とするのが至当である。類似の説話は Jātaka No. 410. Somadatta 帝釈天本生がある。

鹿子本生圖像



漢訳に求めると，生経卷二，弟子過命経，及び経律異相卷四十七に類似のものを見出す。

説話の概略は，雪山に住む仙人が母鹿に死に別れた一頭の仔鹿を大切に育てていたが，或る日草を喰べ過ぎて死んでしまう。仙人は為に悲嘆のどん底に墮ち憂愁の日々を過しているのを哀れと思ひ帝釈天は仙人のもとに來り，仙人が徒らに死者を哀しむことは諸欲厭離の身として却つて恥ずべきだと覺したので仙人は驕然とその非を悟つた。と云う仏教の要諦たる生死觀を素朴な物語としている。

きだと覺したので仙人は驕然とその非を悟つた。と云う仏教の要諦たる生死觀を素朴な物語としている。

弟子過命経では，説話は以下の様に展開する。

仏或るとき舍衛祇樹給孤獨園に遊びたまいしとき，大比丘衆千二百五十人と一緒であつた。そのとき異比丘の弟子あり志性温雅，功德殊異，意行仁賢，至誠安隱，恭順良謹まことに得難い弟子であつたが不幸にして短命であつた。説話はここから始まり，寿命の薄少なことについて比丘，比丘尼，清信士，清信女等がその不幸に嘆き悲しんだが世尊は本生説話を以つて説教し給うた，即ち，

独仏世尊，前世宿命，亦復如是，乃去往古久遠世時，有異閑居，一象生子，墮地未久，其母終亡，去彼不遠，仙人所處，有上威神功德具足，志懷大哀，遙見象子，其母命終纔能举足，東西遊伴，不能自活，即時扶將，詣所止頓，飲之以水，採果飼之，彼時象子，仁和賢善，功德殊妙，樂于義理，冀得安隱，無有憂患，除諸衆惱，於時仙人，臥起同處，身形軀長，衣毛鮮潔，則以水漿，供養仙人，其好果菓，然後自食，往反慇懃，奉侍不懈，彼時仙人，愍哀象子，觀其德行，愛之如子，視之無厭，敬之無極。

時天帝釈則時發念，今此仙人志在象子，猶念無厭，今我寧可別令愁感時，天帝釈，示現試之，化使象子忽然死地而血流離，仙人見之，象子死亡，憂愁回言，涕泣橫流，不能自解，余仙人聞，來諫曉之，不能除憂，不復食飲，時天帝釈，自以其身，住在虛空，即為仙人，而說偈曰。

仁者以棄家	至此無眷屬
諸仙人之法	憂死非善哉
假使悲涕泣	能令死者生
皆當聚閻泣	假啼哭不活
已習共頓止	而與象子供
則有愍恩情	不得不愁憂

死人哭於死 其有啼哭者

明智不懷憂 仙人慧何啼

時天帝釈、令其仙人、懷憂惱已、即令象子使活如故、於時仙人見象子活、尋大踊躍、不能自勝、不復愁憂、時天帝釈、即尋為仙人、而説偈曰、

以拔脚憂惱 心所懷愁感

於今仁無患 而除子憂感

令人離愁惱 及一切親屬

如卿今日歡 見象子起放

時天帝釈以偈頌曰

吾慙傷卿故 欲除諸憂感

故與此因緣 增益於塵勞

明者曉了斯 恩愛生苦患

則察其内外 無得興變化

仏告諸比丘、欲知爾時仙人者則今此和上是、時象子者死弟子是也、天帝釈者則我身也、爾時相遇、今亦如此、仏説如是、草不歡喜、

(大正藏・第三卷本緣部、生經卷第三、仏説弟子過命經第二十九、p. 93)

ここで注意されることはジャータカに於いては仔鹿であるものが子象となつてゐることである。

人間の動物に対する愛情は由来本能的なものであるが、そのうちでも人間に馴れ親しんだもの一家畜の動物—に対しては感情の起伏は大きいものである。然もその馴らされた家畜が大きいだけに篤い情愛が籠もるもので、やや自然的動物たる鹿と純然たる家畜の象とではその対比差は極めて大きい。説話にとり容れられた動物は当初は鹿であつたであろう。だがより説話を洗練化すれば鹿よりもより身近かに親しみの深い象を持ち来つた方が効果的であることに違いない。

譚案者乃至脚色家はこの点に注意を払つて動物を置き換えたものに相違ない。この方がより望ましいと判断されたのであろう。説話の発展という段階からみても、極めて自然だと言えよう。

一契の構図で、仙人の菴居の前に横たわれる仔鹿の死骸をひき起さんとしている仙人と、死者に対して徒らに嘆き悲しむことの益なきを論じている天帝釈を配して如何にも両者間に交わしている会話もききとれるが如くである。構図としては他に致し方もないモチーフである。

なお、逸見梅栄博士の解説では鹿の仔本生は鹿子本生とされている。何れでもよからうが、ここでは鹿の仔本生とする。

大獼猴本生圖像 その一

欄楯石柱円型浮彫。題名は彫られてないが奉獻名と覚しきものが刻まれている。

奉獻名らしいと云い説明されていないのは残念である。^(註)

註) 逸見梅栄; 印度古代美術解説には唯奉獻名とのみ記し、同じく

千淳竜祥; 本生経類の研究附篇にも奉獻名があるとだけ断つている。

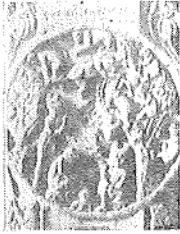
Cunningham; Stupa of Bharhut. PL XXXIII. Fig. 4 にも亦しかり。

記銘の古代ブラフミー文字はかなり明瞭に鑑識し得ると思われるので解説は決して至難ではない訳である。

何れかの機会に触れてみたいが茲では事情を紹介するだけとする。

この猿王の説話も当時かなり流布されていたもののようで、図像例として同期 Sanci の西 Torana 石柱にも彫刻されている。文献としては Jātaka では No. 407 Mahākapi-Jātaka をはじめ Jātakamāla では No. 27. ^{註)} Cariyāpitaka No. 27^{註)}がある。

大獼猴本生図像



註) Edited by Kern. (H. O. S), 1914.

註) Pali-Text Society's Edition.

漢訳經典中に求むると、

六度集經卷六、五六^{註)}

摩訶僧祇律卷十九^{註)}

雜寶藏經卷二、十二、善惡獼猴緣、^{註)}

說一切有部藥事卷十五^{註)}

等かなり多くその典拠を見出し得る。

註) 大正藏經第三卷本緣部上, p. 32. 精進無極章第四, 56

註) 大正藏經第二十二卷律部一, p. 384.

註) 大正藏經第四卷本緣部下, p. 454. 2~12.

註) 大正藏經第二十四卷律部三, p. 72.

往昔、菩薩は獼猴王として生を亨けていた時、獼猴の大群を率いて河辺の大尼拘律樹林に栖み、芳香にして人間娑婆の世界では到底味わうことのできない珍味の果実を食としていた。ところが或る時、その珍果の一夥が河におちて、遙か下流へと流れて行き、ついに国王が拾い上げた。世にも珍らしい果実、しかもすばらしく美味であつたから王は早速、河の上流にその果樹があるに違いないと軍兵を率いて探し索めつつ河を遡つてやつて来た。見ると多数の獼猴がその美味しい果実を貪り喰べている。しめたとばかり軍兵に命じ一群をとり囲ませた。

スワー大事、これを目ざとく見つけた獼猴の王は橋を架して手下のものどもを対岸に逃れさせようと、長い藤を足に結びつけ対岸の樹までジャンプしたが残念ながら藤はわずかに短く、両手をのばしてやつとその樹につかまることができた。

危つかしい橋であるが、橋にはちがいない。獼猴の大群は獼猴王の身を以つて架けた橋を伝わって全員逃れることができた。しかし獼猴王は苦痛甚だしく遂に失心してしまう。

これを審さに見ていた国王は感服して、にわかに天幕の布を掲げ墜ちてくる獼猴王をその上に取りとめて墜死から救つた。

この物語りの眼目は自己犠牲の菩薩行を強調するところにあるのであるから、それだけにいくらかこの物語りを骨子として脚色を加えることができる。むべなるかな漢訳のそれは大同小異ながらそれ相応に脚色を加えられ補筆がなされている。

いまこの説話の終末の部分だけでも之を漢訳經典のうちから脚色のほどを瞥見してみるのもよからう。

大 獼 猴 本 生 第 二

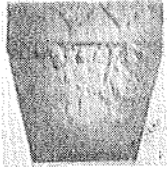
Jātaka では No. 516 の Mahākapi がこれに該当する。逸見；印度古代美術資料では No. 249 で Bharhut 欄楯笠石の浮彫で記録は無い。

大獼猴本生説話(第二)の典拠は Jātaka の外に Jātakamāla 24. にもあり、また漢訳では摩訶僧祇律、卷十八、(仙人獼猴本生經中應説)(大正藏；XXII p. 373)、説一切有部破僧事卷十五、(大正藏；XXIV. p. 176)及び六度集經卷五(四十七)(大正藏Ⅲ本緣部上、p. 27)に記載がある。

六度集經に就いて該説話を求めてみると凡そ以下の章の如くである。

(47) 昔者菩薩。身為獼猴。力幹羴輩。明哲踰人。常懷普慈拯濟衆生。处在深山。登樹採果。觀山谷中有窮陷人。不能自出。數日哀号。呼天乞活。獼猴聞哀。愴為流淚曰。吾誓求仏唯為斯類耳。今不出此人其必窮死。吾當尋岸下谷負出之也。遂入幽谷使人負己。攀草上山置之平地。示其徑路曰。在爾所之。別去之後慎無為惡也。出人疲極就閑臥息。人曰。処谷飢饉。今出亦然。將何異哉。心念當殺獼猴噉之。以濟吾命不亦可乎。以石椎首。血流丹地。猴臥驚起。眩倒縁樹。心無恚意。慈哀愍傷悲其懷惡。自念曰。吾勢所不能度者。願其來世常逢諸仏。信受道教行之得度。世世莫有念惡如斯人也。仏告諸比丘。獼猴者吾身是也。谷中人者調達是。菩薩諸忍度無極行忍辱如是。

大
獼
猴
本
生
図
像
(二)



とあつて菩薩行六波羅密の一、忍辱の徳目を強調した説話となしている。

Jātaka では、山中に於いて途に迷つた男が足を踏み外して断崖から顛落し、谷底に絶望していたが、たまたま一獼猴がこれを見つけ身の危険をも省りみず、その男を背負い救い出した。然しその男はこの生命の大恩人たる獼猴に投石して殺害せんとした。甚だしき忘恩者の物語りとして

いる。そもそも六度集經は、呉康僧会の訳經で、多くの本生説話を六度の菩薩行に配して分類し編集したものである。康僧会が訳經に當つて原本に忠実になしたものであるか、はたまた訳者はまた編集者とも兼ねて康僧会の見解によつて更に他に単伝された説話を随時附加えたものであるか、今にわかに決定し難いが、己に先賢も指摘せる如く、經中さらに「何々經」てふ題名を附するものがあるかと思えば、別に例の如是我聞で始まるものもあることによつて諒知できる。

聞如是、卷一、布施無極章第一

經、波耶王經、卷二、布施無極章

波羅捺国王經、卷二、

薩和檀王經、卷二、

須大拏經、卷二、

聞如是並に經名附

布施度無極經、卷三

仏説四姓經、卷四、

太子墓魄經、卷四、

彌蘭經、卷四、

頂生聖王經、卷四、

普明王經、卷四、

經、雀王經、卷五

之裸国經、卷五、

六年守飢畢罪經、卷五、

釈家畢罪經、卷五、

仏以三事笑經、卷六、

小兒聞法即解經、卷六、

殺身濟賈人經、卷六、

調達教人為惡經、卷六、

殺竜濟一国經，卷六。

彌勤為女人身經，卷六。

女人求願經，卷六。

然燈授決經，卷六。

聞如是，明度無極章第六，（83）卷八。

經，遮羅国王經，卷八。

菩薩以明離鬼妻經，卷八。

儒童受決經，卷八。

聞如是並に經名附

摩調王經，卷八。

阿難念彌經，卷八。

鏡面王經，卷八。

經，察微王經，卷八。

聞如是並に經名附

梵摩王經，卷八。

なお興深いことには禪定無極章，卷第七にはこの章に属すべきもの九章あるが，夫々の章の冒頭は

1. 禪定無極者云何（74）
2. 昔者比丘（75）
3. 菩薩志道（76）
4. 太子出遊（77）
5. 太子初生（78）
6. 太子未得道時（79）
7. 仏行得小經（80）
8. 衆祐自説（81）
9. 昔有兩菩薩（82）

とあり，聞如是乃至昔者で始まる大方の章とは著しく異にするものがある。而もこの特異な章を仔細に検すると所謂本生説話ではなく他のジャンルに属するものである。これらは六度集經成立に関して多くの疑義乃至諸見解の生ずる所以でもある。

またさらに興を添える点是他經にみる本生説話にあつては Bharhut の彫刻に見得る図像とは合致しないものがかなりあるのに比して，この經のものは Bharhut のそれとよく一致するものが多いことである。

学者に依るとなおこの六度集經の伝統と道行般若の伝統とは相等しい系統のものであるとも論ぜられているが，この点については茲では論及しないこととする。

Bharhut の現図浮彫は笠石に彫られたものであるが，スペースの割合に比して，二契乃至三契点の叙景であるし，破損の度も多いし図柄も巧みでない。説話をよくこなし洗練されたモチーフを持つものとは云い難い。

同じ題材のものが，北伝して亀茲キジルの壁画と燉煌千仏洞の壁画にも存することは該説話の東伝を証するのみならず，その図像の東伝をも意味するところから高く大きく評価せねばならないことになる。

牛 王 本 生 図 像

牛王本生説話は稀らしいことにはこれを Jātaka の中に見ることはできないが、根本説一切有部毘奈耶破僧事却一〇に他の説話と混入して記載されているのは有難い。北伝漢訳中にも之の外

牛
王
本
生
図
像

には見当らない。従つて牛王本生説話の典拠は破僧事のみで、それだけに貴重である。いまその個処を摘抄してみると、

…昔於一村有一長者、在此而住、有一大牛衆相具足、時彼長者、延請沙門及婆羅門無依無怙貧婁商客、普設供養、行捨施已遂便解放、具相大牛隨所遊行、更無拘繫、是時大牛既蒙釈放、隨意遊行追覓水草、時行陂沢陷深泥内、自出無由、是時長者日將曛暮、方見人伝遂尋覓之、到其牛所、長者念曰、泥深牛大我独無堪、待至明朝詳来济拔、牛遂告曰、可以繩總繫我角上置於前面任眺方来、如有猴猪来逼我時、我以總繩振角驚怖、其人遂即以繩繫角長、作其總置地而去、既届冥宵、野猴便至、遥視其牛作斯言曰、誰於此処偷竊藕根、牛便報曰、我被泥溺自出無由、非是竊心盜他蓮藕猴聞是語遂与言曰、我之美鱒何忽自来、遂近其牛欲為屠害、牛告猴曰、爾宜遠我莫見相陵、勿使汝身遭羅苦毒、猴雖聞告不齒其言、遂就牛辺欲為擄掣、時勃利沙婆、見不用言、説伽他曰、

我非偷藕根 亦非盜蓮者
必若情存食 上脊応從刳

猴曰、今正是時、応從脊後次第而食、擲上牛脊下口欲喰、牛角振總羈著猴項、遂便攪索空裏懸身、干時大牛説伽他曰、

汝是美少年 戲者空中舞
騁伎於村田 野田無施主
是時野猴亦以伽他而答牛曰

我非作舞者 亦非美少年
帝釈承梯下 吾當往梵天

又復牛王、更説頌曰、

實非天帝釈 投梯往梵天
繩總急動項 性命此時窮

汝諸苾芻、勿生異念、昔時牛王者、即我身是、往日野猴即天授、是往昔不用我言已遭其苦、今不聽吾説現受如斯大殃…

(大正藏；XXIV 律部三，p. 151~152)

昔、或る村の長者の家に一頭の立派な牛が飼われていたが、或る日、解放されて気ままに水草をもとめ歩いている裡、深い泥沼におちこみ自力ではどうしても匍い上れない。飼主の長者は夕暮漸く牛を尋ね当てたものの独りでは牛を曳き上げることが出来ない。結局、牛の言うがままに角に繩を巻つけ仕掛け明るる朝まで放置することとした。

夜になると案の定、狼がやつて来た。

「蓮根を盗みとつている奴は誰だ。」

「私はこの泥沼におちこんだだけのもの、私をとつて食べたければ勝手に私の背中に上つて喰べたらいいだろう。」牛は期する処があるので些かも恐れずに言う。

狼は忽ち牛の背にとびのり咬みつかんとすると、牛は角を振るい用意して置いた繩を巧みに捌

く、繩は狼の項に巧くひつかかり宙に吊り上げて了つた。

「美しい狼君よ、空中で上手に舞つたところで、泥沼の中では見物するものとてないよ」

「いや僕は宙で舞っているのじゃないサ、帝釈天が梯子を投げしてくれたので、これはきつと梵天に伴れて行つて下さるに相違ない」

「大馬鹿者とはお前のことサ、天帝釈が何で梯子を投げ下ろしてくれたものか、繩のワナにかかつてすぐにも生命のつきるものを…」

この牛王（勃利沙婆）とは仏であり狼は提婆達多であつたという。

バルハット欄楯柱の円型浮彫で、説話のクライマックスたる牛王と狼との問答の場＝二契点＝で表現している。牛の上方は全て蓮で花と茎を多く画き蓮沼を示す。牛は印度牛の特徴をコブに現わして左方の狼との問答の体よろしくしてある。下方の狼は鬚索にかからぬ前の姿であり、その上方に逆に狼を表現するのは、仕掛けの索に引つ掛つた後の帝釈天の梯子云々の問答をなす場面の表現と見做してよいだろう。

右側に棒状のものが浮彫せられているが、これについては、恐らく岸上の樹（又は棒、図の右端）より繩の罫を吊して牛の角上に着け、牛が角を振つて狼の項にかければこれを吊り上げ得る様にしたものであろうとの見解^{註)}もある。

註) 逸見；印度古代美術 p. 211 第二五〇図解説

(以下次章)